

展覧会報告（2008年11月～2009年12月）

図書館展示委員会

この1年間、学内外で図書館主催(一部共催)で複数の展覧会を開催した。以下、簡単にそれぞれの概要を報告する。

1) 角田柳作展 ～学術情報の発信の歴史と未来～ 〈第10回図書館総合展 / 学術オープンサミット2008〉

会 期：2008年11月26日（水）～28日（金）

会 場：パシフィコ横浜 展示ホールB

関連行事：講演会「書物という架け橋～角田柳作と早稲田大学図書館～」(教育・総合科学学術院和田敦彦教授、11月26日)

来場者数：展覧会813人、講演会43人。

図書館総合展は、内外の図書館関係者(機関)による、図書館運営にかかわる最新の技術、コンピュータ・システムなどを紹介する場としてよく知られているが、図書館、特に大学図書館が独自にブースを設け、活動内容を紹介するといった試みはなされていなかった。10回目を迎えるにあたり、主催者からの要望もあって、初めて図書館として正式に参加し、当館が進める館蔵資料に関する積極的な情報発信について紹介した。具体的には、2007年に早稲田で、2008年夏にコロンビア大学で開催した角田柳作展の主な資料のパネルと、古典籍総合データベースについての解説と利用方法、収載資料のパネルを展示、さらに会場にPCを設置し、来場者に古典籍DBの画面操作、プリントアウトなどを体験していただいた。

角田については前年の展覧会以来、日米両国の文化交流に力を尽くしたその姿を紹介してきたが、やはり知名度はいまだ高くはなかった。それでも展示をご覧になるにしたがい、その存在と功績に感銘をうけた方も多かったようである。

来場者の多くが図書館で実務に携わっている方が多いせいか、古典籍DBについての関心は高く、質問も相次いだ。特に、館蔵のすべての古典籍を対象としている点、精細画像を新規に撮影していること、またそれらの情報(書誌・画像)を原則としてアクセス制限をせずに、無料で公開してい

る点に驚きの声が多く聞かれた。学外者からの感想や意見を直接聞くことができたのは大きな収穫であった。来場者への「お土産用」として、ダウンロードした画像を使った絵葉書、ブックカバーをその場で印刷して配布したのだが、他館の関係者から「同様のものを作成したい」との声を複数いただくなど、こちらも大好評であった。

2) 図書館企画展「群雄割拠!!」

～戦国の世から天下統一へ～

会 期：2009年3月25日(水)～4月16日(木)

会 場：総合学術情報センター2階展示室

近年、戦国時代がブームになっており、大河ドラマ「天地人」も好評だったようである。そうした世相にあわせ、企画した展示である。

応仁の乱から大坂夏の陣ころまでの資料を、ほぼ時代順に展示したが、この時代のものは古文書を中心として館蔵資料の中でも充実した分野の一つなので、かなり内容の濃い展示となった。具体的には、戦国武将の文書、軍記物、合戦絵図、さらには合戦を描いた錦絵などを展示したが、なか



でも多くの来場者の注目を集めたのが斎藤利三所用と伝わる「茶糸威二枚胴具足」である。10年ほど前の「館蔵資料でたどる日本の歴史」展以来の出陳となり、会期前後には複数の問合せを受けた。

会期を通じて来場者に恵まれ、開催期間が例年よりも短期間であったにもかかわらず、この時期としては異例の1,000人ほど入場者があった。また、会期最終日に教育学部の日本史関係の授業の一環として60名近くの学生たちが来場したが、その多くが時間を過ぎて熱心に資料に見入り、質問を投げかけてきてくれるなど、好評だった。

3) 東アジアの＜近代＞をみる

岡松参太郎文書展

会 期：2009年4月21日（火）～4月29日（水）

会 場：総合学術情報センター2階展示室

主 催：早稲田大学図書館、

早稲田大学東アジア法研究所

岡松参太郎は戦前、台湾・満洲の植民地法制を立案し、京都帝国大学法科大学の設立にもたずさわった民法学者であり、その父甕谷（ようこく）は、中江兆民らが師事した著名な儒学者である。図書館が所蔵する「岡松参太郎文書」は、彼ら親子2代にわたるもので、東アジアにおける＜近代＞そのものを映し出す貴重な資料であり、2008年10月にその全容がマイクロフィルム版で刊行された。本展示は、その中から比較的状态が良く、特に重要なもののみを集めたもので、全体に資料の劣化が激しいものも多く、今後原本は非公開となるため、展覧会に出陳する最後の機会と考えられる。かなり専門的な内容であり、かつ会期も短期間であることから、来場者数が心配されたが、予想以上に多くの方たちが来場し、この分野での研究が盛んであり、かつ公開が求められていた資料であることをあらためて知ることができた。

4) ＜日本近世文学会春季全国大会開催記念＞

近世文藝の輝き—早稲田大学所蔵近世貴重書展—

会 期：2009年5月14日（木）～6月18日（木）

会 場：大隈記念タワー10階125記念室

主 催：日本近世文学会・早稲田大学図書館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

日本近世文学会の平成21年度春季全国大会が早

稲田大学で開催されたのを記念し、同学会と図書館、演劇博物館の共催で開催されたものである。創立以来、坪内逍遙、市島謙吉をはじめ、多くの人々の努力によって、図書館や演劇博物館には、数百万点に及ぶ和漢洋さまざまな資料が蔵されるようになった。とりわけ、文学、演劇、洋学など近世文藝全般にわたる古典籍等は、戦前からの収蔵品に、戦後も貴重書を加えて、国内有数のコレクションに発展してきている。そうした資料から貴重書を厳選し、展示したものである。学会関係者だけでなく、学生、学外の文学愛好者など多くの来場者に恵まれた。

5) ＜中古文学会春季大会記念＞

「源氏物語の絵と注釈」展

会 期：2009年5月22日（金）～6月10日（水）

会 場：総合学術情報センター2階展示室

協 力：中野幸一（早稲田大学名誉教授）

2008年は、『源氏物語』が世に知られるようになってちょうど1000年という区切りの年にあたり、各地でさまざまなイベント、展覧会が開催されたが、その余韻の中で『源氏物語』とその享受資料に関する資料の展覧会を開催した。これは、中古文学会春季大会等に合わせたもので、早稲田大学図書館が新たに収蔵した九曜文庫を中心とした資料で構成した。九曜文庫は、源氏物語研究の泰斗である中野幸一先生（早稲田大学名誉教授）が蒐集されたもので、『源氏物語』やその研究、享受資料の写本や版本、さらには画帖、絵巻、錦絵などの絵画資料まで、学界注目の貴重な資料が揃っている。今回、先生のご厚意により館蔵とすることができたが、本展示はその最初のお披露目の機会となった。1000年前に成立した『源氏物語』が、多くの人々に愛されいかに読み継がれていったかを実感できる展示として好評だった。

6) ＜万葉集1250年記念＞

万葉集～享け継がれるその思い～

会 期：2009年10月16日（金）～11月17日（火）

会 場：総合学術情報センター2階展示室

主 催：早稲田大学日本古典籍研究所・早稲田大学図書館

2009年は、『万葉集』に収められた歌で成立年の

わかっているもののうち、もっとも新しい歌ができてから1250年にあたる節目の年ということで、各地で様々な記念行事がおこなわれた。これにあわせ図書館でも、早稲田大学日本古典籍研究所との共催で『万葉集』をテーマとした展覧会を開催することとなった。

『万葉集』は、後の世の詩歌だけでなく、多方面の学問、芸術に影響を与えたが、時代、分野を超えて『万葉集』との接点を持っている資料は数多くある。そうした資料を通じて、日本文化史において『万葉集』の担った意義を広く認識していただく機会とする内容となった。

7) 第11回図書館総合展／学術オープンサミット2009 明治の錦絵と写真～近代日本の情報発信～

会 期：2009年11月10日（火）～12日（木）

会 場：パシフィコ横浜 展示ホールB

昨年に引続き「第11回図書館総合展／学術オープンサミット2009」において、図書館としてブースを設置、標記の展示をおこなった。展示内容は会場のある横浜の開港150年の記念の年ということで、館蔵資料の中から幕末から文明開化の時代にスポットをあて、錦絵新聞、彩色写真（横浜写真）など、当時の社会、文化を映し出す資料をご覧いただくこととした。ブースの大きさは昨年の約半

分であったが、入口近くの好位置を確保できたこと、錦絵を用いたポスターが効果的だったこともあって昨年と比べて約2.5倍の2009人の来場者があった。今回も会場にPCを設置し、古典籍DBに収載した錦絵新聞、彩色写真の画像をご覧いただき、絵葉書を差し上げたのだが、こちらも大好評だった。こうした形での図書館のPRも今後さらに重要になってこよう。

8) 鴨川市・早稲田大学交流事業

早稲田大学図書館所蔵古写真展江戸・明治の幻景展

会 期：2009年11月28日（土）～12月6日（日）

会 場：鴨川市立図書館 集会室

主 催：鴨川市・鴨川市教育委員会・早稲田大学

鴨川市に早稲田大学のセミナーハウスが建設された1997年から数年にわたり、図書館所蔵資料を同市の図書館で展示する交流事業をおこなったが、今回、同市からの申し入れを受け、久しぶりに展覧会を開催した。内容は、幕末・明治期の彩色写真（横浜写真）とそのアルバム、関連資料である。直前の横浜で図書館総合展に出陳したものを中心に約60点の写真を展示した。会期最初の週末には図書館から藤原が展示解説にゆき、翌週は現地の学芸員に解説を依頼した。来年度以降も継続しての開催を要望されているが、今後は文化推進部などとの連携のもと、図書館だけでなく学内諸機関の積極的な関与が期待される。

展覧会は図書館が主体的にかかわることのできる資料についての情報発信の場だと言える。多くの人にその存在を知ってもらいたい資料について、また図書館が利用者に知ってほしい情報を、見たくなる、知りたくなるように工夫して公開することが、現在の図書館には求められる。その一つの手段として、図書館員自らの手になる展覧会は重要な機会であり、今後もその意義をよく理解した上でかかわってゆく必要があろう。

（文責：藤原秀之）

